

(七) 刷毛工業

獸毛を扱う事業は筆を扱う熊野の人の独占場であろう。この意味に於て刷毛工業が筆の都熊野に発達したことは当然であり、寧ろその発達の歴史からいえば遅きに失するとも言えるであろう。刷毛については和名抄（九二三〜九三〇）にもその例が見えており、元禄年間（一六八八〜一七〇三）には江戸にましら屋等の著名な刷毛屋があつて、漆刷毛、糊刷毛、齒揚子等の製産が伝えられるが、いわゆる刷毛工業と銘をうつものは明治以降のことである。

熊野町の刷毛工業は、大正末期現商工会長の高本正氏が試みたのが最初である。発足当時としては優秀品は望めないし、その企業化が先ず問題とせられなければならなかつた。随つて製造技術の修得と改善が急務であり、愛媛県から青野某を招いてその衝に当らせたのもこの間の事情を物語るものである。

その後、刷毛工業は毛筆業と併行して本町の新興工業として次第に発達してきたが、その大勢としては毛筆産業の蔭に隠れて比較的目立たない存在であつた。いわば刷毛工業そのものが近代産業としての要素を多分に持ち、大都市工業の所有物であることに対する苦心の過程でもあつたわけである。しかし、終戦後になると事情は一変した。それは戦後、特に昭和二十二年の小学校に於ける習字廃止に伴う毛筆業不振の社会情勢に負うところも大きいが、獸毛を扱う毛筆業者の進取的な歩みが刷毛工業という新しい場を得て花を咲かせたとも言えるのである。事実戦後の新しい空気の中で、数名の先覚者達は時代の波を乗りきろうとして有

限会社組織の刷毛業を始めようとさえ試みたこともあつた。

こうした機運に支えられ、現在ではそれが一応専業として成りたつ地歩を固め、獸毛作業の一角に新たな息吹を盛りたてている観がある。刷毛工業としては、毛筆と同様いろいろな種類が考えられ、小は薬筆や機械油筆から大は糊刷毛、ペンキ刷毛等に至るまで用途と需要とによりバライテイは頗る多般に亘つている。が、経営的にも順調な成育を遂げているのは眉筆、口紅筆等の化粧筆と白粉用の化粧刷毛とであろう。最近本町調査の資料によれば工業用注油筆乃至は刷毛の製造業者は五、化粧用のそれは七を示しているが、特に後者の地歩は次第に健実さを加えつゝあるようである。

業種	業者
工業刷毛 化粧筆及刷毛	七五
計	一二

備考 昭和三十三年一月
施の工業統計調査に
よる

本町からの販売形態は阪神地方のメーカーに穂首のみを送り出し、その地において製品を完成する場合と、既にこの地で製品として荷出しする場合との二つが考えられる。前者は獸毛作業がわれわれの独占的特殊技術であるためで、われわれは強い誇りをもつてこの技術提供を見守りたいものである。だが、後者にあつては、製品が流行を造り出すものだけにとりわけ、不断の創意と工夫とがいるわけである。ハンドルに用いるフーパー乃至はラクトロイドにも十分の吟味と向上とが必要である。又、これ等の色相、配色、形態等の意匠や広告技術にもたゆまぬ研究が続けられなければならない。その意味において進取的経営者が接触面の広い例えば大阪地方にハンドル工場を直営していることは特筆すべきことがらであろう。戦後十年にして早くもここまでたどりついた努力はこの種の経営が更に一步前進したものととして眺めてよいと思う。更に刷毛工業の前にも単に国内需要のみならず海外輸出例えば韓国、台湾、及東南アジア向の外需が開けていることは前途に明るい希望をそそぐものである。現にこれ等の地方の人へは或る程度の輸出が行われており、それが、直接、間接われわれの郷土につながるをもつことは疑うべくもない。阪神、京浜を心臓とし各地を周辺とする現在の内需に依存することのみ

が、われわれの将来の目標であるはずはない。国外の乙女のメイクアップを左右することに商魂をもやしてゆくことは、やがて、新興のこの事業を發展させてゆく足場ともなるにちがいない。